

中國小説史略考證第十一

著者	中嶋 長文
雑誌名	神戸外大論叢
巻	45
号	5
ページ	1-23
発行年	1994-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002088/



中國小說史略考證 第十一

中 島 長 文

第十一篇 宋之志怪及傳奇文

1 宋既平一字內、以至狐九卷

九十一

寫印本『大略』十、宋人之話本云、宋太平興國間、既得諸國圖籍、而降王諸臣、皆海內名士、或宣怨言、因悉收用之、使修羣書、成太平御覽一千卷。又以野史傳記小說諸家、編成五百卷、分五十五部曰太平廣記、三年八月表上、六年正月奉旨雕版頒行。當時或言廣記非後學所急、因收板藏太清樓、見者甚勤。二書至今尙存。晉唐五代小說、本書雖散亡、尙得藉廣記收見涯略、其於後來、爲益多矣。鉛印本『大略』第十篇「宋之志怪及傳奇文」は「史略」に同じ。「探撫宏富」の「撫」字、初版から十一版まですべて「撫」に誤るが、鉛印本「大略」は誤まらない。三八年版全集で訂された。

「小説的變遷」第四講云、然宋之士大夫、對于小説之功勞、乃在編『太平廣記』一書。此書是搜集自漢至宋初的瑣語小說、共五百卷、亦可謂集小説之大成。不過這也并非他們自動的、乃是政府召集他們做的。因爲在宋初、天下統一、國內太平、因招海內名士、厚其廩餼、使他們修書、當時成就了『文苑英華』、『太平御覽』和『太平廣記』。此在政府

的目的、不過利用這事業、收養名人、以圖減其對於政治上之反動而已、固未嘗有意于文藝。但在無意中、却替我們留下了古小說的林藪來。

『破』唐人說會』全集第八卷集外集拾遺補編云、爲避免『說會』之禍起見、我想出一部書來、就是『太平廣記』。這書的不佳的小板本、不過五元而有六十多本、南邊或者更便宜。雖有錯字、但也無法、因爲再好便是明板、又是寶貝之類、非我輩之力所能得了。我以爲『太平廣記』的好處有二、一是從六朝到宋初的小說幾乎全收在內、倘若大略的研究、即可以不必別買許多書。二是精怪、鬼神、和尚、道士、一類一類的分得很清楚、聚得很多、可以使我們看到厭而又厭、對於現在談狐鬼的『太平廣記』的子孫、再沒有拜讀勇氣。『魯迅藏書目錄』類書類には民國二十三年（一九三四年）年に北京文友堂が影印した明の談愷刻本を著録するけれども、刊行の時期からみて魯迅はこれをほとんど利用しなかったと考えられる。彼が古籍の輯校に利用したのは、この文中に言う巾箱本、つまり清の黃堯峰が刊刻したいわゆる槐蔭草堂本である。但し『藏書目錄』は却ってこれを著録しない。

王明清『揮麈後錄』卷一云、太平興國中、諸降王死、其舊臣或宣怨言。太宗盡收用之、實之館閣、使修羣書。如冊府元龜、文苑英華、太平廣記之類、廣其卷帙、厚其廩祿贈給、以役其心、多卒老於文字之間云。朱希真云。津逮秘書本。

『太平廣記表』云、臣昉等言。臣先奉勅撰集太平廣記五百卷者。伏以六籍既分、九流並起、皆得聖人之道、以盡萬物之情、足以啓迪聰明、鑒照今古。伏惟皇帝陛下、體周聖啓、德邁文思、博綜羣言、不遺衆善、以爲編秩既廣、觀覽難周。故使采摭菁英、裁成類例。惟茲重事、宜屬通儒。臣等謬以誤聞、幸塵清賞、猥奉修文之寄、曾無叙事之能、退省疎蕪、惟增醜冒。其書五百卷、并目錄十卷、共五百十卷。謹詣東上閣門奉表上進以聞、冒瀆天聽。臣昉等誠惶誠恐頓首頓首謹言。

太平興國三年八月十三日。

將仕郎守少府監丞臣呂文仲、臣吳淑。
朝請大夫太子中贊善柱國賜紫金魚袋臣陳鄂。
中大夫太子左贊善直史館臣趙隣幾。
朝奉郎太子中允賜紫金魚袋臣董淳。
朝奉大夫太子中允紫金魚袋臣王克貞臣張洎。
承奉郎左拾遺直史館臣宋白。
通奉大夫行太子率更令上柱國賜紫金魚袋臣徐鉉。
金紫光祿大夫上柱國陳縣男食邑三百戶臣湯悅。
朝散大夫充史館修撰上柱國賜紫金魚袋臣李穆。
翰林院學士朝奉大夫中書舍人賜紫金魚袋臣扈蒙。
翰林院學士中順大夫戶部尚書知制誥上柱國隴西縣開國男食邑三百賜紫金魚袋臣李昉。

八月二十五日奉勅送史館。

六年正月奉聖旨雕印板。

汪校本。

『玉海』卷五四云、實錄。太平興國二年三月戊寅、詔翰林學士李昉、扈蒙左補闕知制誥李穆、太子少詹事湯悅、太子率更令徐鉉、太子中允張洎、左補闕李克勤、右拾遺宋白、太子中允陳鄂、光祿寺丞徐用賓、太府寺丞吳淑、國子監丞舒雅、少府監丞呂文仲、阮思道等十四人同以前代修文御覽、藝文類聚、文思博要及諸書、分門編爲一千卷。又以野史傳說小說、雜編爲五百卷。(後略)

又云、會要。先是帝閱類書、門目紛雜、遂詔修此書。興國二年三月、詔昉等取野史小說、集爲五百五十九部、天部

至百卉。三年八月書成。號曰太平廣記。二年三月戊寅所集、八年十二月庚子成書。六年、詔令鑱版。廣記鑱本頒天下、言者以爲非學者所

急、收墨板、藏太清樓。二書所命官皆同。唯克勤、用真、思道改他官、續命太子中允王克正、董淳、直史館趙隣幾預焉。

談愷「太平廣記附識」云、按宋太平興國間、旣得諸國圖籍。而降王諸臣、皆海內名士、或宣怨言。盡收用之、實之

閣、厚其廩餼、使修羣書。以修文御覽、藝文類聚、文思博要、經史子集一千六百九十餘種、編成

覽。又以野史傳記小說諸家、編成五百卷、分五十五部、賜名太平廣記、詔鑱板頒行。言者以廣記非後學所急、收板藏

太清樓。於是御覽盛傳、而廣記之傳鮮矣。崇文總目不及廣記。夾漈鄭樵、乃謂太平御覽、別出廣記、

謂博雅、不知於實錄會要諸書會攷訂否。余歸田多暇、裨官野史、手抄目覽。匪曰小道可觀、蓋欲賢於博奕云爾。

太平廣記觀之。傳寫已久、亥豕魯魚、甚至不能以句。因與二三知己秦次山、強綺塋、唐石東、互相校讐。寒暑再更、

字義稍定。尙有闕文闕卷、以俟海內藏書之家、慨然嘉惠、補成全書、庶幾博物洽聞之士、得少裨益焉。

上元日都察院右都御史致仕十山談愷書。汪校本。

『四庫提要』卷一四二、子部小說家類三云、太平廣記五百卷。宋李昉奉勅監修。同修者扈蒙、湯悅、徐鉉、

張洎、董淳、趙隣幾、陳鄂、呂文仲、吳淑十二人也。以太平興國二年三月奉詔、三年八月表進。此據宋會要之文。玉海則作

二年三月戊寅所集、八年十二月庚子書成。未詳孰是。六年正月勅雕版印行。凡分五十五部、所採書三百四十五種。古來軼聞瑣事

僻爰遺文咸在焉。卷帙輕者往往全部收入、蓋小說家之淵海也。玉海稱、廣記鑱本頒行天下、後以言者謂非學所

收版貯之太清樓、故北宋人多未之睹。鄭樵號爲博洽、而通志校讐略中、乃謂太平廣記爲太平御覽中別出

記異事、誤合兩書而一之。是樵亦未嘗見矣。其書雖多談神怪、而採摭繁富、名物典故錯出其間、詞章家恒所採用、考

中國小說史略考證 第十一 正誤表（四ページ）

又云、會要。先是帝閱類書、門目紛雜、遂詔修此書。興國二年三月、詔昉等取野史小說、集爲五百卷。五十九部、天部至百卉。三年八月書成。號曰太平廣記。二年三月戊寅所集、八年十二月庚子成書。六年、詔令鏤版。廣記鏤本頒天下、言者以爲非學者所急、收墨板、藏太清樓。二書所命官皆同。唯克勤、用賓、思道改他官、續命太子中允王克正、董淳、直史館趙隣幾預焉。談愷「太平廣記附識」云、按宋太平興國間、旣得諸國圖籍。而降王諸臣、皆海內名士、或宣怨言。盡收用之、實之館閣、厚其廩餼、使修羣書。以修文御覽、藝文類聚、文思博要、經史子集一千六百九十餘種、編成一千卷、賜名太平御覽。又以野史傳記小說諸家、編成五百卷、分五十五部、賜名太平廣記、詔鏤板頒行。言者以廣記非後學所急、收板藏太清樓。於是御覽盛傳、而廣記之傳鮮矣。崇文總目不及廣記。夾漈鄭樵、乃謂太平御覽、別出廣記、專記異事。樵自謂博雅、不知於實錄會要諸書曾攷訂否。余歸田多暇、裨官野史、手抄目覽。匪曰小道可觀、蓋欲賢於博奕云爾。近得太平廣記觀之。傳寫已久、亥豕魯魚、甚至不能以句。因與二三知己秦次山、強綺塋、唐石東、互相校讐。寒暑再更、字義稍定。尙有闕文闕卷、以俟海內藏書之家、慨然嘉惠、補成全書、庶幾博物洽聞之士、得少裨益焉。嘉靖丙寅正月上元日都察院右都御史致仕十山談愷書。汪校本。

『四庫提要』卷一四二、子部小說家類三云、太平廣記五百卷。宋李昉奉勅監修。同修者扈蒙、湯悅、徐鉉、宋白、王克貞、張洎、董淳、趙隣幾、陳鄂、呂文仲、吳淑十二人也。以太平興國二年三月奉詔、三年八月表進。此據宋會要之文。玉海則作二年三月戊寅所集、八年十二月庚子書成。未詳孰是。六年正月勅雕版印行。凡分五十五部、所採書三百四十五種。古來軼聞瑣事僻筌遺文咸在焉。卷帙輕者往往全部收入、蓋小說家之淵海也。玉海稱、廣記鏤本頒行天下、後以言者謂非後學所急、收版貯之太清樓、故北宋人多未之睹。鄭樵號爲博洽、而通志校讐略中、乃謂太平廣記爲太平御覽中別出廣記一書、專記異事、誤合兩書而一之。是樵亦未嘗見矣。其書雖多談神怪、而採摭繁富、名物典故錯出其間、詞章家恒所採用、考

證家亦多所取資。又唐以前書世所不傳者、斷簡殘編、尙間存其什一、尤足貴也。此本爲明嘉靖中右都御史談愷所刊、頁間有闕佚。胡應麟二酉綴遺曰、談於此書頗肆力校讎、第中闕咄鄙類二卷、無懶類二卷、輕薄類一卷、而酷暴類闕胡澗等五事、婦人類闕李誕等七事。談謂偏閱諸藏書家悉然、疑宋世已亡。又曰、輕薄類劉祥許敬宗等皆見六朝諸史及唐書雜說、談已考補、餘目中有姓名者、尙多互見諸書。惟出小說中而其書今亡者、難悉究矣云云。則書在當時已非完帙、今亦姑仍舊本錄之焉。

引用書の數を『史略』は「三百四十四種」とする。これは『太平廣記』の卷首に掲げる引用書目を數えたのだらうが、數えちがいで正しくは「三百四十三種」としななければならない。しかし實際に引用された書物はもっと多く、鄧嗣禹「太平廣記引得序」によれば、書目にあがらないものが百四十七種あり、合計四百七十五種になるといふ。そして現存する書が二百三十五、佚亡したのが二百四十、と約半數がすでに元の書を見ることができない。また分門五十五部とするのは、『玉海』の「五十五部、天部より卉に至る」という注を承け、談愷附識、『四庫提要』みなそれを承け、さらに『史略』も襲ったわけであるが、これはやはり「太平廣記引得序」が指摘の通り、『太平御覽』の注であつて、王應麟が注記の場所を誤つたのである。『太平廣記』は九十二類、細分すれば百五十餘になる。

『郡齋讀書志』卷一三、小説類云、太平廣記五百卷、右皇朝太平興國初、詔李昉等取古今小說編纂成書、同太平御覽上之。

『直齋書錄解題』卷二一、小説家類云、太平廣記五百卷、太平興國二年、詔學士李昉扈蒙等修御覽、又取野史傳記故事小説撰集、明年書成、名太平廣記。

『宋志』卷五云、李昉太平廣記五百卷。

尤袤『遂初堂書目』小説類云、京本太平廣記。明鈔『說郛』二八。南宋刊本かと考えられているもの。以上各宋本は今見ることができない。清の孫潜が鈔宋本に據って校訂したという一本が臺灣大學中文系に所藏され、それによる校勘が嚴一萍校録『太平廣記校勘記』（民國五九年・臺灣藝文印書館）として公刊されている。

周弘祖『古今書刻』卷上、常州府云、太平廣記。談刻ないし許刻との關係は不明。

以上明代までの書目に著録されたものの他、次のテキストが流傳する。

談愷刻本 明嘉靖丙寅（四五）序刊本 以後に流傳する各テキストの祖本となったもの。何度かの刊行に際して手を加えられたため、何種か異同のあるテキストがある。民國二十三年北京文友堂影印本。一九七二年京都中文出版社影印本。

許自昌刻本 明刊本 『四庫簡明目録標注』は嘉靖中刊とするが、許刻本が談刻本を承けているとすれば、それはありえない。少なくとも隆慶以後の刊行である。

明活字本 「太平御覽引得序」は舊刊本の中で最も劣悪とする。

四庫全書本 談刻本による。臺灣商務印書館影印文淵閣本、一九九〇年上海古籍出版社影印本。

黃堯峰刻本 乾隆十八年序刊槐蔭草堂本 清代を通じて最も通行したテキスト。小字本又は巾箱本と称する。これの重刊本はかなり誤字脱誤が多いという。臺灣新興書局影印本。

筆記小説大觀本 民國刊 進步書局石印本 臺灣新興書局景印文明書局本 江蘇廣陵古籍刻印社景印進步書局本。

掃葉山房本 民國十五年石印本 他書からの竄入があり、全く信用できない版本として有名。

汪紹楹校中華書局本 一九六一年刊 談愷刻本を底本とし、陳鱣が殘宋本を用いて校勘した明刻本、明沈氏野竹齋

鈔本、許自昌刻本、黃堯峰刻本を参照し校訂したもので、いま最も見やすい版本である。

2 『太平廣記』以李昉監修、以至而此道于是不復振也。

九一三

寫印本『大略』十云、宋時名人好言異事者、最先有徐鉉、作稽神錄六卷、已收入廣記中。後有洪邁。下略。」鉛印本『大略』は「志怪又欲以『可見』見長」の「又」字を「始」字とする他は『史略』に同じ。なお「鉉在唐時」で句讀を切るのは鉛印本『大略』から三八年版全集まですべてそうで、五七年版全集に至って讀點をはずした。また「常希收探」の「常」字は、鉛印本『大略』、初版では「甚」に作り、合訂二版で「當」に作り、三版ではじめて「常」となった。三版は「淳熙二年」の「二」字を脱す。

『宋史』卷四四一文苑傳云、徐鉉字鼎臣、揚州廣陵人。十歲能屬文、不妄游處、與韓熙載齊名、江東謂之「韓、徐」。仕吳爲校書郎、又仕南唐李昇父子、試知制誥、與宰相宋齊丘不協。時有得軍中書檄者、鉉及弟鍔評其援引不當。檄乃湯悅所作、悅與齊丘誣鉉・鍔洩機事、鉉坐貶泰州司戶掾、鍔貶爲烏江尉、俄復舊官。

時景命內臣車延規・傅宏營屯田於常・楚州、處事苛細、人不堪命、致盜賊羣起。命鉉乘傳巡撫。鉉至楚州、奏罷屯田、延規等懼、逃罪、鉉捕之急、權近側目。及捕得賊首、即斬之不俟報、坐專殺流舒州。周世宗南征、景徙鉉饒州、俄召爲太子右諭德、復知制誥、遷中書舍人。景死、事其子煜爲禮部侍郎、通署中書省事、歷尚書左丞・兵部侍郎・翰林學士・御史大夫・吏部尚書。

宋師圍金陵、煜遣鉉求緩兵。時煜將朱令贊將兵十餘萬自上江來援、煜以鉉既行、欲止令贊勿令東下。鉉曰、「此行未保必能濟難、江南所恃者援兵爾、奈何止之。」煜曰、「方求和解而復決戰、豈利於汝乎。」鉉曰、「要以社稷爲計、豈顧一介之使、置之度外可也。」煜泣而遣之。及至、雖不能緩兵、而入見辭歸、禮遇皆與常時同。及隨煜入覲、太祖責之、聲甚厲。鉉對曰、「臣爲江南大臣、國亡罪當死、不當問其他。」太祖歎曰、「忠臣也。事我當如李氏。」命爲太子

率更令。

太平興國初、李昉獨直翰林、鉉直學士院。從征太原、軍中書詔填委、鉉援筆無滯、辭理精當、時論能之。師還、加給事中。八年、出爲右散騎常侍、遷左常侍。淳化二年、廬州女僧道安誣鉉姦私事、道安坐不實抵罪、鉉亦貶靜難行軍司馬。

初、鉉至京師、見被毛褐者輒哂之、邠州苦寒、終不御毛褐、致冷疾。一日晨起方冠帶、遽索筆手疏、約束後事、又別署曰「道者、天地之母。」書訖而卒、年七十六。鉉無子、門人鄭文寶護其喪至汴、胡仲容歸其葬於南昌之西山。鉉性簡淡寡欲、質直無矯飾、不喜釋氏而好神怪、有以此獻者、所求必如其請。鉉精小學、好李斯小篆、臻其妙、隸書亦工。嘗受詔與句中正·葛湍·王惟恭等同校說文。中略。鉉親爲之篆、鏤板以行于世。

鉉有文集三十卷、質疑論若干卷。所著稽神錄、多出於其客蒯亮。錯所著則有文集·家傳·方輿記·古今國典·賦苑·歲時廣記云。

袁褰『楓窗小牘』卷上云、太宗命儒臣修太平廣記、時徐鉉實無編纂。稽神錄鉉所著也。每欲採擷、不敢自專、輒示宋白、使問李昉。曰、徐率更以博信天下、乃不自信而取信于宋拾遺乎。詎有率更言無稽者、中採無疑也。于是此錄遂得見收。」稗海本。無當作與。

『郡齋讀書志』卷一三云、稽神錄六卷。右南唐徐鉉撰。記怪神之事。序稱、自乙未歲至乙卯、凡二十年、僅得百五十事。楊大年云、江東布衣蒯亮好大言夸誕、鉉喜之、館於門下。稽神錄中事、多亮所言。袁本「六卷」作「十卷」。

『直齋書錄解題』卷一一云、稽神錄六卷。南唐徐鉉撰。元本十卷。今無卷第、總作一卷、當是自他書中錄出者。

『四庫提要』卷一四二、子部小說家類三云、稽神錄六卷。宋徐鉉撰。鉉字鼎臣、廣陵人。仕南唐爲翰林學士、隨李煜歸宋、

官至直學士院給事中散騎常侍。淳化初、坐累謫靜難軍司馬、卒於官。事蹟具宋史本傳。是編皆記神怪之事。晁公武讀書志載其自序、稱自乙未歲至乙卯、凡二十年。則始於後唐廢帝清泰二年迄於周世宗顯德二年、猶未入宋時所作。書中惟乾寧天復天祐開成同光書年號、自後唐明宗以後、則但書甲子。考馬永卿懶真子樞、南唐自顯德五年用中原正朔、士大夫以爲恥、碑文但書甲子。此書猶在李璟去帝號前三年、殆必原用南唐年號、入宋以後追改之。其稱楊行密曰僞吳、稱南唐曰江南、其官亦稱僞某官、亦入宋以後所追改歟。讀書志云、所載一百五十事。陳振孫書錄解題云、元本十卷、此無卷第、當是他書中錄出者。案今本止六卷、而反有一百七十四事、宋又有拾遺十三事。與晁氏陳氏所云卷數條數俱不合。案楓窗小牘云、太宗命儒臣修太平廣記、時徐鉉實與編纂。稽神錄鉉所著也。每欲採擷、不敢自專、則示宋白、使問李昉。昉曰、詎有徐率更言無稽者。於是此錄遂得見收。疑是錄全載太平廣記中、後人錄出成帙。而三大書徵引浩博、門目叢雜、所列諸書凡一名疊見者、太平御覽皆作又字、文苑英華皆作前名字、廣記皆作同上字。其間前後相連以甲蒙乙者往往、而是或緣此多錄數十條亦不可知也。讀書志又云、楊大年云、江東布衣蒯亮好大言誇誕、鉉喜之、館於門下、稽神錄中事多亮所言。考鉉騎省集中、有送蒯參軍亮詩。前四句云、昔年聞有蒯先生、二十年來道不行、抵掌曾談天下事、折腰猶忤俗人情。則鉉客實有蒯亮、然不言及說鬼事。又書中載破爛得碁子得鍼二章云、聞之於亮。則不題亮名者似非亮語。趙與峕賓退錄備載洪邁夷堅志諸序、稱其三志庚集序考徐鉉稽神錄、辨楊文公談苑所載蒯亮之事非是。其說必有所考、今不得而見之矣。

『郡齋讀書志』は序を引いて「僅かに百五十事」というが、いま『廣記』に收録されるのは計二百二十一事ある。序が書かれたのは南唐の保大十三（九五五）年で、宋に入るまでに二十年ある。それ以後、『廣記』收録までの間に増補されていたのであろう。『直齋書錄解題』は「原本十卷、いま卷第無く、総じて一卷と作す」というから、その

ころすでに輯本があったことが分る。いま見られる比較的よいテキストは、すべて津逮秘書本系のもと考えられる。「六卷拾遺一卷」で、一七五事と拾遺十三事、計一八八事を収める。學津討原本、庫本、叢書集成初編本があり、さらに民國八年涵芬樓排印本（『宋元說部叢書』に入る）が刊行され、これには補遺一卷四十七事（陸心源等輯）が加わり、計二三五事となり、最も完備した輯本である。『廣記』の收録数より多いのは傳寫の過程で『稽神錄』と誤認されたものも混入しているためかもしれない。

3 所引『稽神錄』

10018

引用文の末に卷数が附けられていることから『廣記』ではなく刊本によったことが分る。『廣記』所收のこれら二條は、それぞれ卷四三八、卷二二〇で、どちらにも字句に出入がある。刊本のうちで『史略』の引用に最も近いのは津逮秘書本である。卷二の引用については、「必生西溪浩氏爲牛」の部分、津逮秘書本は「西」字の上に「某」字がある。これは各本があるが、意が通じないので、引用の際に刪ったのだと思われる。「子當贖之、而」は津逮秘書本と同じだが、學津討原本、涵芬樓本はいずれも「子當尋而贖」に作る。『藏書目錄』の涵芬樓本にはよらなかったのだろう。『藏書目錄』には叢書部に津逮秘書存六種のうちに『稽神錄』六卷宋徐鉉撰を著録する。卷三については各本一致する。

4 吳淑、以至至今尙不衰

10018

寫印本『大略』九云、唐人雜說中、亦間記豪俠之事、然無專書別行者、殆惟虬髯一傳、太平廣記類爲四卷（一百九十三至九十六）、明人別刻之、改名劍俠傳、妄題段成式作。然亦以此流行世間、如紅拂崑崙隱娘紅線、明以來卽傳爲美談者、皆出乎此。鉛印本『大略』は「怪民奇異事」の「奇」字を「幻」字に作るほかは「史略」と變らない。

『宋史』卷四十二文苑傳云、

吳淑字正儀、潤州丹陽人。父文正、事吳、至太子中允。好學、多自繕寫書。淑幼俊爽、屬文敏速。韓熙載、潘佑以文章著名江左、一見淑、深加器重。自是每有滯義、難於措詞者、必命淑賦述。以校書郎直內史。／江南平、歸朝、久不得調、甚窮窘。俄以近臣延薦、試學士院、授大理評事、預修太平御覽、太平廣記、文苑英華。一日、召對便殿、出古碑一編、令淑與呂文仲・杜鎬讀之。歷太府寺丞、著作佐郎。始置祕閣、以本官充校理。嘗獻九絃琴五絃阮頌、太宗賞其學問優博。又作事類賦百篇以獻、詔令注釋、淑分注成三十卷上之。遷水部員外郎。至道二年、兼掌起居舍人事、預修太宗實錄、再遷職方員外郎。（中略）淑性純靜好古、詞學典雅。初、王師圍建業、城中乏食。里閭有與淑同宗者、舉家皆死、惟存二女孩。淑卽收養如所生、及長、嫁之。時論多其義。有集十卷。善筆札、好篆籀、取說文有字義者千八百餘條、撰說文五義三卷。又著江淮異人錄三卷・祕閣閑談五卷。

『師弟答問集』第一六頁云、〔増田問云〕122頁 鉉字鼎臣、……官至直學士院給事中 and? 散騎常侍、〔魯迅答云〕no! 學士院ヲ番_ニ直スル給事中ニシテ且ツ散騎常侍ナリ

〔増田問云〕ク 鉉在唐時、已作志怪、…比修廣記、常希收采而不敢自專、…〔常〕平常 or 嘗? 〔魯迅答云〕常_ニ嘗_ニカツテ 昔ハコノ二字、通用スル_ヲアリ ケレ_レモ実ハ間違デス、

『直齋書錄解題』卷五云、江淮異人錄二卷。吳淑撰。所紀道流・俠客・術士之類、凡二十五人。

『四庫提要』卷一四二、子部小說家類三云、江淮異人錄二卷永樂大典本。宋吳淑撰。淑有事類賦、已著錄。是編所紀多道流俠客術士之事、凡唐代二人、南唐二十三人。徐鉉嘗積二十年之力、成稽神錄一書。淑爲鉉婿、殆耳濡目染、挹其流波、故亦喜語怪。鉉書說鬼、誕漫不經、淑書所記、則周禮所謂怪民、史記所謂方士、前史往往見之、尙爲事之所有。其

中如耿先生之類、馬令陸游二南唐書皆採之、則亦非盡鑿空也。尤袤遂初堂書目載此書、作江淮異人傳、疑傳寫之譌。又宋史淑本傳載是書三卷、而陳振孫書錄解題作二卷、宋藝文志亦同、則列傳以二爲三、由字誤矣。其書久無傳本、今從永樂大典中掇拾編次、適得二十五人之數、首尾全備、仍爲完書。謹依宋志仍分爲上下二卷、以復其舊焉。

『江淮異人錄』のテキストは『史略』が述べるように『永樂大典』からの輯成本があり、具體的には庫本と李調元の涵海本だと考えられる。それらは目次も本文も一致する二卷本である。しかしこの外に道藏本・知不足齋叢書本があり、これらは前記永樂大典輯成本とはその構成を異にする。ともに二十五人の話を記すが、『永樂大典』本が、唐代玄宗時代の二人を含むのに對して、道藏本等はそれを收めず、すべて南唐の人だと考えられ、そのうち「虔州の少年」「瞿童」の二事は『永樂大典』本にはない。收録の順序もまったく異り、各故事も道藏本等の方が長いが多い。以上の事から道藏本の方が古い形態を傳えている可能性が高いと考える。知不足齋叢書本は鮑庭博の跋によれば明嘉靖刊伍光忠本に據るということであるが、伍本は道藏に據ったのであろう。なお龍威秘書はこの叢書にしては珍しく、知不足齋叢書本に基いている。

『劍俠傳』については拙稿10-7をも参照。

5 所引『江淮異人錄』

101+11

前文で『永樂大典』本のあることを言うが、まことに不思議なことに引用する文は最も道藏本に近く、『永樂大典』本によったとは考えにくい。「吾家且未有食」の「且」字が道藏本・知不足齋叢書本では「旦」字になっているだけで、他はすべて一致する。それに對して引用の「有書生過、憫之」「及復出」「求之不得」は、『永樂大典』本（庫本）では「有書生過而憫之」「反復出」「求之不見」に作る。さらに涵海本になると「見一小兒賣鞋」の「賣」字を

「賈」字に作り、「已斷其首。乃」を「已斷其首來」に作る。後者などnI交替で抄者の出身地が思われて楽しいが、句讀まで違ってくることになる。これは一つの謎であつて説明のしようもないが、道藏本・知不足齋本も『永樂大典』本も收録する人間の數がともに二十五人であるところから、魯迅は道藏本系によつたにもかかわらず、それも『永樂大典』からの輯本だと考えたと解釋する他ない。庫本はともかく、函海本も見なかったことになる。

『師弟答問集』第一六頁云、「増田問云」以頁『江淮異人錄』ヨリノ引文 成幼文爲洪州錄事參軍、……傳於頭上、
捽其髮摩之、皆化爲水、「皆」血？on頭？『魯迅答云』頭全部ガ皆ナ水ニ變化シマシタ、実ニ神妙ナ藥デス。

6 宋代雖云崇儒、以至稱於世

二〇一九

寫印本『大略』にはここに該當する記述はない。鉛印本『大略』では「似皆嘗呈進以供上覽」を「似皆先後進御以供上覽」に作つて意味が重複する他は『史略』と同じである。

○張君房『乘異記』

『郡齋讀書志』卷一三云、乘異記三卷。右皇朝張君房撰。其序謂「乘者、載記之名、異者、非常之事。」蓋志鬼神變化之書、凡十一門、七十五事。

『直齋書錄解題』卷二云、乘異記三卷。南陽張君房撰。咸平癸卯序。取晉之乘之義也。君房又有脛說、家偶無之。晁公武讀書志以脛說爲張唐英君房撰。又言君房著名臣傳、蜀檮杌、雲笈七籤行於世。按君房、祥符天禧以前人、楊大年改閑忙令所謂紫微失却張君房者、卽其人也。嘗爲御史屬、坐鞫獄貶帙、因編修七籤、得著作佐郎。七籤序自言君房、蓋其名非字也。唐英字次功、熙豐間人、丞相商英天覺之兄、作名臣傳、蜀檮杌者、與君房了不相涉、不知晁何以合爲一人也。其誤明矣。

「咸平癸卯」は咸平六年、西紀一〇〇三年であり、『史略』が「咸平元年」とするのは字形の類似による誤りである。鉛印本『大略』からすべて誤っている。この書は散佚してしまい、明鈔『說郭』卷四の『乘異錄』二條が僅かに残る遺文だと思われる。重較『說郭』一一八の四條はあてにならない。張君房は道書の類書である『雲笈七識』の編者として有名だが、その履歷についてはよく解らない。『四庫提要』の『雲笈七識』の解題に附されたのがその概略である。小説には他に『摺紳脞說』『麗情集』等があるが、いずれも散佚して傳わらない。

○張師正『括異志』

『郡齋讀書志』卷一三云、括異志十卷。右皇朝張師正撰。師正擢甲科、得太常博士。後遊宦四十年、不得志、於是推變怪之理、參見聞之異、得二百五十篇。魏泰爲之序。

『直齋書錄解題』卷一云、括異志十卷後志十卷。襄國張師正撰。

『四庫提要』卷一四四、子部小說家類存目二云、括異志十卷。舊本題宋張師正撰。師正字不疑、熙寧中爲辰州帥。文獻通考載師正擢甲科、後宦遊四十年、不得志、於是推變怪之理、參見聞之異、得二百五十篇。魏泰爲之序。此本不載魏序、蓋傳寫佚之。然王銍默記以是書卽魏泰作。蓋泰爲曾布之婦兄、而銍則曾紆之壻、猶及識泰。其言當不誣也。

『邵氏聞見後錄』卷十六云、「王」性之跋范仲尹墓誌云、近時襄陽魏泰者、場屋不得志、喜僞作它人著書、如志怪集、括異志、倦遊錄、盡假名武人張師正、又不能自抑、出其姓名、作東軒筆錄、皆用私喜怒誣譏前人、最後作碧雲霞、假名梅聖俞、毀及范文正公、而天下駭然不服矣。且文正公與歐陽公梅公立朝同心、詎有異論。特聖俞子孫不耀、故挾之借重以欺世。今錄楊闢所作范仲尹墓誌、庶幾知泰亂是非之實至此也。則其他泰所厚誣者、皆迎刃而解、可盡信哉。僕猶及識泰、知其從來最詳、張而明之、使百世之下、文正公不蒙其謬焉。潁人王銍性之題。

『括異志』はいま鐵琴銅劍樓舊藏の抄宋本が傳わり、四部叢刊續編に收められる。全十卷百三十三篇を收めるが、完本ではない。張師正についてもよく分らない。『郡齋讀書志』によれば士人であるが、王銍は武人という。王銍の言を信ずるとすれば、『讀書志』の記述は魏泰と張師正を混同したのかもしれない。

○聶田『祖異志』

『郡齋讀書志』卷一三云、祖異志十卷。右皇朝聶田撰。田、天禧中、進士不中第、至元祐初、因記近時詭聞異見一百餘事。天禧至元祐七十餘年、田且百歲矣。

『直齋書錄解題』卷二云、祖異志十卷。信陵聶田撰。康定元年序。

書はすでに散佚して傳わらない。聶田も傳未詳。『書錄解題』がいう「序」の「康定元年」(西紀一〇四〇)が正しければ、『讀書志』のいう「元祐」(一〇八六—九四)はおそらく誤りで、康定の直前の寶元(一〇三八—三九)、ないしはさらにその前の景祐(一〇三四—三七)の可能性がある。そうなれば『讀書志』の百歲になんなんとするという訝しみも解けることになる。

○秦再思『洛中紀異』

『郡齋讀書志』卷一三云、洛中紀異十卷。右皇朝秦再思記五代及國初讖應雜事。

まとまっては明鈔『說郛』卷三・卷二十に引かれる。前者には三條、すべて唐代の事で『讀書志』の言う所と合わないが、他書の文なのか、『讀書志』の誤りか、にわかに決しがたい。卷二十には十二條を抄録する。また『分門古今類事』には二十餘條の遺文を拾うことができる。秦再思の傳は未詳。

○畢仲詢『幕府燕閑錄』

『郡齋讀書志』卷一三云、幕府燕閒錄十卷。右皇朝畢仲詢撰。仲詢、元豐初爲嵐州推官、纂當代奇怪可喜之事、爲二十門。

いま明鈔『說郛』卷三に三條、卷十四に七條、また『分門古今類事』に十七條の遺文がある。撰者の傳未詳。

○郭象『睽車志』

『直齋書錄解題』卷一云、睽車志五卷。知興國軍、歷陽郭象次象撰。取睽上六載鬼一車之語。

『四庫提要』卷一四二、子部小說家類三云、睽車志六卷。宋郭象撰。象字伯象、和州人。由進士歷官知興國軍。是書皆紀鬼怪神異之事、爲當時耳目所見聞者。其名睽車志、蓋取易睽卦上六載鬼一車之語也。張端義貴耳集曰、憲聖在南內愛神鬼幻誕等書、郭象睽車志始出、洪景廬夷堅志繼之。似此書嘗經進御矣。宋史藝文志小說家類載有是書一卷。陳振孫書錄解題作五卷、而明商維藩刻入稗海者又作六卷、參錯不一。考夷堅志載趙三翁得道事、有張儔朋父爲作傳、郭象伯象得其文、載於睽車志末云云。今勘檢此本、惟張儔作張壽、傳寫異文、其在卷末、則與洪說相應、知猶舊本。特後人屢有分析、故卷目多寡互異耳。書中所載多建炎紹興乾道淳熙間事、而汴京舊聞亦間爲錄入。各條末悉分註某人所說、蓋用杜陽雜編之例。其大旨亦主於闡明因果、以資勸戒。特撫拾既廣、亦往往緣飾附會、有乖事實、如米芾本北宋名流、而疑爲麟精。程迥亦南渡宿儒、多所著述、而以爲其家奉玉眞娘子、由此致富。張翥能斥姦平亂、志操甚正、身後尙廟食邵武、而以爲挾嫌殺人、白晝見鬼而卒。皆灼然可知其妄。其他亦多涉荒誕、然小說家言、自古如是。不能盡羅以史傳、取其勉人爲善之大旨可矣。

張端義『貴耳集』卷上には『四庫』の引用に續けて「唐已有此集、夷姓堅名也」と言ひ。なお「憲聖」は高宗皇后吳氏である。テキストは稗海本・庫本・叢書集成初編本があり、いずれも同系統六卷本である。郭象の傳は未詳。

7 洪邁幼而強記、以至則於此書可謂知言者已

1011三

寫印本『大略』 十、承2所引云、後有洪邁、作夷堅志甲至癸二百卷支甲至支癸三甲至三癸各一百卷四甲至四乙二十卷、每編有小序、各出新意、時人頗賞之、而卷帙之多、亦爲古所未有。鉛印本『大略』は「史略」と同じ。なお「各出新意、不相重複」はもと「資治通鑑」の評語であり、原文では「複重」に作る。鉛印本『大略』から七三年版全集に至るまですべてそう作る。「重複」に作るのはおそらく新版全集の誤植であろう。もとに戻して「複重」に作るべきである。また「以繁夥自熬」の「夥」字を五八年版全集のみ同音の「伙」字に作る。

『宋史』卷三七三洪邁傳云、邁字景廬、皓季子也。幼讀書日數千言、一過目輒不忘、博極載籍、雖裨官虞初、釋老傍行、靡不涉獵。從二兄試博學宏詞科、邁獨被黜。紹興十五年始中第、授兩浙轉運司幹辦公事、入爲勅令所刪定官。皓忤秦檜投閑、檜憾未已、御史汪勃論邁知其父不靖之謀、遂出添差教授福州。累遷吏部郎兼禮部。中略。

三十二年春、金主褒遣左監軍高忠建來告登位、且議和、邁爲接伴使、知閣門張掄副之。上謂執政曰、「向日講和、本爲梓宮・太后、雖屈己卑辭、有所不憚。今兩國之盟已絕、名稱以何爲正、疆土以何爲準、朝見之儀、歲幣之數、所宜先定。」及邁・掄入辭、上又曰、「朕料此事終歸於和、欲首議名分、而土地次之。」邁於是奏更接伴禮數、凡十有四事。自渡江以來、屈己含忍多過禮、至是一切殺之、用敵國體、凡遠迎及引接金銀等皆罷。既而高忠建有責臣禮及取新復州郡之議、邁以聞、且奏言、「土疆實利不可與、禮際虛名不足惜。」禮部侍郎黃中聞之、亟奏曰、「名定實隨、百世不易、不可謂虛。土疆得失、一彼一此、不可謂實。」兵部侍郎陳俊卿亦謂、「先正名分、名分正則國威張、而歲幣亦可損矣。」

進起居舍人。時議遣使報金國聘、三月丁巳、詔侍從・臺諫各舉可備使命者一人。初、邁之接伴也、既持舊禮折伏

金使、至是、慨然請行。於是假翰林學士、充賀登位使、欲令金稱兄弟敵國而歸河南地。夏四月戊子、邁辭行、書用敵國禮、高宗親札賜邁等曰、「祖宗陵寢、隔闕三十年、不得以時洒掃祭祀、心實痛之。若彼能以河南地見歸、必欲居尊如故、正復屈己、亦何所惜。」邁奏言、「山東之兵未解、則兩國之好不成。」至燕、金閤門見國書、呼曰、「不如式。」抑令使人於表中改陪臣二字、朝見之儀必欲用舊禮。邁初執不可、既而金鎖使館、自旦及暮水漿不通、三日乃得見。金人語極不遜、大都督懷忠議欲質留、左丞相張浩持不可、乃遣還。七月、邁回朝、則孝宗已卽位矣。殿中侍御史張震以邁使金辱命、論罷之。明年、起知泉州。中略。

紹熙* 改元、進煥章閣學士、知紹興府。過闕奏事、言新政宜以十漸爲戒。上曰、「浙東民困於和市、卿往、爲朕正之。」邁再拜曰、「誓盡力。」邁至郡、覈實詭戶四萬八千三百有奇、所減絹以匹計者、略如其數。提舉玉隆萬壽宮。明年、再上章告老、進龍圖閣學士。尋以端明殿學士致仕、是歲卒、年八十。贈光祿大夫、諡文敏。

邁兄弟皆以文章取盛名、躋貴顯、邁尤以博洽受知孝宗、謂其文備衆體。邁考閱典故、漁獵經史、極鬼神事物之變、手書資治通鑑凡三。有容齋五筆、夷堅志行於世、其他著述尤多。所修欽宗紀多本之孫覿、附耿南仲、惡李綱、所紀多失實、故朱熹舉王允之論、言佞臣不可使執筆、以爲不當取覿所紀云。

中華書局校點本『宋史』は「紹熙改元」について次のような校記を附ける。「紹熙、原作『淳熙』。按上文已敘至淳熙十三年、此處不應又說『淳熙改元』。據『嘉泰會稽志』卷二、洪邁知紹興府在紹熙元年。洪邁『夷堅志』乙集序有『紹熙庚戌臘、予從會稽西歸』語。『淳』字爲『紹』字之訛、據改。」「『史略』は『宋史』の原文のままに讀んで、淳熙二年沒と考え、それから逆算して一〇九六、紹聖三年の生れとしたわけである。しかし『淳熙改元』を『紹熙改元』（一一九一）に變えたところで、記述の矛盾は解決できない。というのは他ならぬ『夷堅志』支志甲の序が「紹

熙五年六月」であり、現存する最後の序、つまり三志辛の序が慶元四年（一一九八）六月八日の日附を持っているからである。これは『宋史』の叙述には混亂があり、正しくは錢大昕の『洪文敏公年譜』が考證するごとく、かれの生没は宣和五（一一二三）—嘉泰二（一一〇三）年としなければならない。

「夷堅乙志序」云、夷堅初志成、士大夫或傳之、今鏤板于閩、于蜀、于婺、于臨安、蓋家有其書。人以予好奇尙異也、每得一說、或千里寄聲、於是五年間又得卷帙多寡與前編等、乃以乙志名之。凡甲乙二書、合爲六百事、天下之怪怪奇奇盡萃於是矣。夫齊諧之志怪、莊周之談天、虛無幻范、不可致詰。逮于寶之搜神、奇章公之玄怪、谷神子之博異、河東之記、宣室之志、稽神之錄、皆不能無寓言於其間。若予是書、遠不過一甲子、耳目相接、皆表表有據依者。謂予不信、其往見烏有先生而問之。乾道二年十二月十八日、番陽洪邁景廬敘。

八年夏五月、以會稽本別刻于贛、去五事、易二事、其它亦頗有改定處。淳熙七年七月又刻于建安。

「夷堅支甲序」云、夷堅之書成、其志十、其卷二百、其事二千七百有九。蓋始末凡五十二年、自甲至戊、幾占四紀、自己至癸、才五歲而已。其遲速不侔如是。中略。初予欲取稚兒請、用十二辰續未來篇帙。又以段柯古雜俎謂其類相從四支、如支諸臬支動支植、體尤崛奇。於是名此志甲支甲、是於前志附庸、故降殺爲十卷。紹熙五年六月一日野處老人序。並中華書局本。

趙與峕『賓退錄』卷八云、洪文敏著夷堅志、積三十二編、凡三十一序、各出新意、不相複重、昔人所無也。今撮其意書之、觀者當知其不可及。甲志序所以爲作者之意。乙志謂前代志怪之書、皆不無寓言。獨是書遠不過一甲子、爲有據依。中略。庚志謂、……初甲志之成、歷十八年。自乙至己、或七年、或五年。今不過數閱月、閑之爲助如此。然平生居閑之日多、豈不趣成書、亦欠此巨編相傳益耳。中略。支庚謂四十四日書成、自詫其速、且叙其所以速由。中略。三志

甲謂樓子偃孫、羅前人所著稗說來示、如徐鼎臣稽神錄、張文定公洛陽舊聞記、錢希白洞微志、張君房乘異、呂灌園測幽、張師正述異志、畢仲詢幕府燕閒錄七書、多歷年二十、而所就卷帙皆不能多。三志甲才五十日而成、不謂之速不可也。後略」上海古籍出版社宋元筆記叢書本。』三志甲で「五十日」と言い、支庚で「四十四日」と言うが、ここには引かない支癸の序では「支癸三十日の間に成る。世の所謂拙速は、度るに此に過ぐる無きなり」と言う。

洪邁の生没年の變更によつて『史略』あるいはそれが基いた先行資料の記述、たとえば『史略』の「夷堅志」則爲晚年遣興之書、始刊於紹興末、紹筆於淳熙初、十餘年中、云々」などという部分は再吟味の必要がある。乙志の序には「ここに於て五年の間、また卷帙の多寡前編と等しきを得たり、乃ち乙志を以て之に名づく」とある。この序は乾道二（一一六六）年十二月に書かれているから、五年前は確かに紹興の末（一一六一）で、この年に甲志が完成し上梓されたのだろう。その限りでは『史略』の記述の通りだが、支志甲の序によれば、「夷堅志」の書の成るや、その志は十、その巻は二百、その事は二千七百有九。けだし始末は凡そ五十二年、甲より戊に至るは、ほとんど四紀を占め、己より癸に至るははつかに五歳のみ」と言う。逆算すれば洪邁がこの書に着手したのは紹興十三（一一四三）、かれが二十一歳の年であり、それ以後甲志成書まで十八年の時間が過ぎてゐる。その後乙志まで五年、さらに丙志まで五年というふうで、決して十餘年の中に四百二十巻が完成したのではない。もちろん本人自ら言うように、紹興府を辭した紹興元年、作者六十八歳、書にして己志以降は編纂の速さが加速度的になつていく。その過程を表にすれば次のようになる。『洪文敏公年譜』の闕をいささか補うことになる。

紹興十三（一一四三）年 開始編著『夷堅志』

洪邁二十一歳

支甲序云、蓋始末凡五十二年、自甲至戊、幾占四紀、自己至癸、才五歳而已。」癸志成於紹興五年。

紹興三十一（一一六一）年 甲志成

三十九歲

乙序云、夷堅初志成、士大夫或傳之。今鏤板于閩、于蜀、于婺、于臨安、蓋家有其書。人以予好奇尚異也、每得一說、或千里寄聲、於是五年間又得卷帙多寡與前編等、乃以乙志名之。

乾道二（一一六六）年十二月十八日 乙志序

四十五歲

乾道七（一一七一）年五月十八日 丙志序

五十歲

紹熙元（一一九〇）年 己志成

六十八歲

支甲序云、自己至癸、才五歲而已。」支乙序云、紹熙庚戌（元年）臘、予從曾稽西歸、……閑不爲外華、故至甲寅（紹熙五年）之夏季、夷堅之書緒成辛壬癸三志、合六十卷、及支甲十卷。財八改月、又成支乙一編。於是予春秋七十三矣。……慶元元年二月二十八日。

同年十二月以前 庚志成

庚序「賓退錄」八引云、初甲志之成、歷十八年、自乙至己、或七年、或五六年、今不過數閱月、閑之爲助如此云々。

紹熙二（一一九一）年

六十九歲

自此年至紹熙四年間辛志成。

紹熙四（一一九三）年 壬志成

七十一歲

癸序「賓退錄」八引云、謂九志成、年七十有一、擬綴輯癸編。

紹熙五（一一九四）年 癸志成 據癸序、又支乙序。

七十二歲

同年六月一日 支甲序

慶元元（一一九五）年二月二十八日 支乙序

同年十月十三日 支景序

慶元二（一一九六）年三月十九日 支丁序

同年七月初五日 支戊序

同年十月 支己成

支庚序云、起良月庚午、至臘癸丑、越四十四日、而夷堅志支庚之書成、凡百三十有事。

同年十二月八日 支庚序

慶元三（一一九七）年 支辛成

同年四月 支壬成

支庚序云、支癸成于三十日間、世之所謂拙速、度無過此矣。……慶元三年五月十四日序。

同年五月十四日 支癸序

同年七月 三甲成

三甲序『寶遺錄』八引云、三志甲才五十日而成、不謂之速不可也。

自慶元三年七月至同四年四月之間、三乙・三景・三丁・三戊成。

慶元四（一一九八）年四月一日 三己序

以後至六月間三庚成。

七十三歲

七十四歲

七十五歲

七十六歲

同年六月八日 三辛序

同年九月初六日 三壬序

以後三癸・四甲・四乙成。『賓退錄』卷八云、至四志乙則絕筆之書、不及序。

(待續)